City

clea

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｃｉｔｙ

【Ｎコード】
Ｎ２７６１Ｃ

【作者名】
ｃｌｅａ

【あらすじ】
静かな殺人者が、自身の打った弾丸のせいで、奇妙な運命に巻き込まれることとなる。ある女との奇妙なつながりが、今始まった。

第1話

―４ｔｈ　ＺＥＲＯ―

日が落ちる。俺は少し前に付けたばかりの煙草を消して、頭の中に浮かぶ取り留めの無い追憶を打ち消した。人を殺めるのは非道だと、誰かが言う。だが俺は他人の言うことを、頭から飲むようなことはしない。それはこの世界で生きるには必要な行為だ。

何年もこの世界にいると気がおかしくなって、いわゆる新聞沙汰の事件を起こすようなやつもいる。どんな人間でも心の最下層には罪の意識を持っているものだ。だからそれが知らない内に心の中で働いて、頭で考えていることと、心の働きが一致しなくなることがある。そうすると気が狂う。特にこの世界に居座っている奴等は、そういった状況に陥ることが多い。俺がそういった状況に陥らないのは、殺しをやめたこと、そして俺に殺しを止めさせた人間のおか

げである。俺はいつものように—だがいつもより長く—そいつのことを考えていた。

2

俺はいつものように引き金を引いた。恐らくこの—人を殺める—瞬間俺は、無表情なのだと思う。見下ろした光景が止まって見える。世間では偉大と歌われている政治家が、苦悶の表情を浮かべることもなく倒れた。悲鳴はいつも遅れてやってくる。それはこの時も同じだった。

振り向くと、何故か悲しさが胸に残った。

いつものように仕事をすませると、雇い主に電話を掛ける。相手の話は俺の耳を通り抜けていくが、別段気にすることも無い。何故ならそれが日常だからだ。部屋に戻ると、煙草に火をつけてソファに深く腰掛ける。吐いた紫煙が広がっては、消えた。いつからかはわからないが、俺は心を失っていたようだ。その証拠に、この時俺はもう何も感じていなかった。

それから1週間が過ぎた。この仕事は一回で報酬がそれなりに入る。だからしばらくは仕事を

することはない。といってもそれでは唯単に何もしない時間が増えるだけなのであるが。別に

それを悲観することはなかった。その日は雨が降っていた。ドアの向こうから、水で濡れた床

と靴が立てる耳障りな音が微かに聞こえていた。気にせずに瞼を閉じると、いっそうソファに

深く身を委ねた。しばらくそうしていると、もうドアの向こうから耳障りな音は聞こえなくな

った。だが。代わりに普通は聞きなれているだろうが、俺は聞きなれていない、無機質なイン

ターホンが突然部屋に鳴り響いた。瞬間的に身構えると、俺は不気味に光る、俺を守る術を手

に取った。音を立てずにドアの近くに忍び寄る。

「誰か、いらっしゃいませんか。」

女の声だ。なんてことはない。俺は手に握り締めた鉄の塊を懐にしまうと、また音も立てずに

元のソファへと戻った。

「誰か・・」

一体誰だ?このフロアには俺しか住んでいないが、あまり家の前に

たたずんでいては怪しまれ
るのではないか。そうすると、俺にも不都合だ。声は大きくないが、規則的に聞こえ続けてい
る。世間では今日は休日なので、他のフロアに住んでいる人間がドアの前の女に気づくことが
あるかもしれない。感じたことのない嫌悪感を身に纏って、俺は再びドアの前にやってきた。

「誰だ。」

一瞬ドアの向こうが沈黙した。しかし直ぐに

「開けてください。」

今までにない強い声が返ってきたので、俺は懐を確かめた。

「誰だ。と聞いてるんだ。」

「開ければわかります。だから・・」

何故俺はそうしたのか、今になってもわからないが、俺は返事をせずにチェーンをつけたまま
ドアを開いた。俺の目に美しい女が写る。

「ちゃんと全部あけてください。じゃないと話ができません。」

「これでも話はできる。」

「開けないと大声を出しますよ。」

強情な女だ。その瞳は確かに強いが、身体は華奢である。肩にかかる髪が、品のある雰囲気を

際立たせた。

俺はまた驚くべきことに、チェーンをはずし、ドアを開けた。

入って来た女が後ろ手にドアを閉める。

「誰だ？」

女は黙ったままだ。

「おい・・」

その瞬間だった。

咄嗟に鋭い殺気が俺の脇をかすめる。一瞬で身を後ろに引くと、女の手元に視線をやった。そ

の手にはしっかりと、冷酷に光るナイフが握られている。女は体勢を崩し前のめりになった

が、困惑する俺を尻目に体勢を立て直すと、再びそのナイフを俺に向かって突き出した。俺は

それを横に避け、冷酷な手を蹴り上げる。ナイフが手から落ち、重い音が響く。一瞬もないほど少し、世界が沈黙した。俺は咄嗟に懐から手に銃を収め、それを女に向けた。

「何のつもりだ。」

低い声で、そう女に問いかけた。女は銃を恐れてはいないようだった。

「あなたは私の父を殺した。」

何のことかわからなかった。直ぐに、女の口からあの偉大な政治家の名前がこぼれる。

「恨みがあったわけじゃない。」

「だけどあなたは殺した！父を・・」

「俺は道具だ。命令した人間は別にいる。悪かったとは思っている。だが、俺を殺したところ

であんたの気は済まないと思うぜ？」

何故悪かった、と女に謝ったのかはわからないが、もしかするとその強い瞳に引き込まれた

せいなのかもしれない。

女はなすすべもなく、嗚咽を漏らして、崩れ落ちた。

第2話

「有り得ないわ。」
女は窓のほうを向いてこちらを見もせず、そう呟いた。外の雨はもう止んでいて、残ったのは抗えない不快感。そして何よりコンクリートから立ち上る湿気である。
「今煙草を吸ってないんだ、まだましだろう。」
車内には煙草の臭いが残っているが、言うなればこれは忘れがたい記憶だ。記憶は現実を求める。紫煙の煙が恋しかった。
「この臭いだけで不快なの。」
女の横顔は厳しい。だがそれは同時にこの上ないほど美しくもあった。栗色の艶やかな髪は肩にかかり、ふわりと甘い花の香りを放つ。吸い込まれるような、黒い瞳。通った鼻の下にある、形のはっきりとした口。すべてが絶妙なバランスでまとまっている。人の作りえない美だ。
「珍しいな。海外で街頭演説・・」
女は少ししかめ面をした。しかしその美の調和は少しも崩れない。
「あなたそれ本気で言ってるの？世相を全く知らないのね。」
「意識的に新聞やテレビの情報には触れないようにしている。」
それは本当だ。しかし彼女の父が何故この国に来ているか、そしてそれがどのような意味を持つかは知っていた。目は塞いでも耳までは塞いでいない。
「不幸な仕事だわ。」
窓の外を眺めながら、軽蔑したような声で彼女は言った。

「どういうことだ？お前がそれを聞いてどうする。」
トマス・ハウゼンは俺を睨みながら言った。オフィス、といっても狭いビルの一室が静かになった。
「興味を持った。」

ハウゼンは苛立った様子で煙草に火を点けた。重苦しい煙を吐き出すと、俺をもう一度睨んだ。
「俺はお前を信頼している。だからいつもだったら依頼人のことなんかなんだって言ってやるさ。本来はそうあるべきだろうからな。だがお前はいつもそれを意図的に避けてきた。だったら今回もそれは同じはずだ。」
「いつも同じとは限らない。」
三回目の紫煙を吐き出すと、落ち着いたのか、顔つきが緩んだ。
「何が裏にある。女か？」
俺はポケットから煙草を取り出して、それを吸った。久しぶりの呼吸だ。肺が本物の空気を取り込んだ。
「お前が女？世も末だ。感情に流されないのがお前だったのにな。」
「そろそろ潮時かもしれない。」
俺は斜め下を見ながら、そう言った。
「言えないほどの存在、か。」
俺は踵を返した。狭いオフィスだ。二歩歩けば、この狭苦しい空間から開放される。
「聞かせてくれ。何があった？」
ハウゼンは名残惜しそうに、そう尋ねた。
「考えないことほど罪なことはない。それに気付いただけだ。」
もう振り返る必要はなかった。無言が、背中に投げかけられた。

「何かわかったの？」
車に戻ると、彼女はその強い瞳を向けて、俺に答えを強制した。
「ああ。大体はな。」
「これからどうするの？」
その声には、さっきまでは感じられなかった満足が少し入り混じっていた。
「俺が聞きたい。仮にあんたの父親を殺せと命令したやつに会えたとする。そしたらどうするつもりだ？」

「殺すのよ。」
全く不釣合いだ。彼女は殺気をぎらつかせていた。先刻のあのナイフのように。
「無理だ。あきらめろ。」
「何故よ！」
火を見るより明らか。とはこのことだ。
「女が一人で入って出られるところじゃない。この国で一番危険なところの一つだ。」
「かまわないわ。後のことは何も考えてないの。」
「あんたが仇を殺す前に死ぬ。」
はっ、と彼女が息を呑んだ。いくら気丈に振舞っていても、それは見掛けだけだ。少し見た目が他に勝っているというだけで、人を殺せるような人間ではない。自ら人を殺めることを望むのは、そう。狂人だけだ。

雨がまた降り始めた。いつのまにか通りは暗くなっていたようだ。薄暗いクーペの中で、彼女は一筋の涙をこぼした。

第3話

その時、雨はまた大降りになっていた。他人の人生に初めて深く関わったその時に、俺は初めてこの世に生を受けたのかも知れない。それまでの俺は、いわば死人と同様だったのだ。

美しい横顔は涙に濡れて一層美しさを増している。悲しみとはこれほどまでに人の心を打つものなのか。地面を叩く雨の音が激しさを増すほど、この薄暗いクーペの中にいる俺と彼女の存在は、周りの世界から隔離されたようにぼやけてしまう。俺はもう当ても無く夜道を車で走っている。

「・・・どこへ行くの？」

赤くなった目を少し俺のほうに向けて彼女はそう尋ねた。

「わからない。」

前を見るのすら億劫なほど、俺はその時憂鬱に襲われていた。

「止めて。」

彼女は静かに、だが強くそう言い放った。俺の耳にはその言葉が届いているようで、届いていない。

「止めて！！」

不意に彼女が怒鳴る。今まで出したことの無いような大声で。俺は言われるままに車を止めた。辺りの人通りはまばらだ。この雨も手伝って、誰もが足を速めている。

「降りるわ。」

「こんな所で降りてどうする。」

「言ったでしょう。私はもう何も考えていないの。」

彼女は深刻な顔付きで、ドアを開け豪雨の中へ飛び出していった。

何故この時彼女を止めなかった？

俺は再び車を闇雲に走らせた。憂鬱がこれほどまでに強く心に働きかけることをその時まで俺は知らなかったのだ。今まで感じていたのは憂鬱ではなかったのだろう。長い間死人のような生活をしていれば、自然と心など羽の重さほどもないような軽い存在に成る。精神、心、究極的に観念に縛られたこれらの概念は、まるで実態があるかのように振る舞い人に付きまとう。俺は長いことそれから解放されていた。それが良いか悪いかもわからずに。

古びたアパートに帰ってきたときにはもう朝日が顔を覗かせていた。雨はどこに去ったのか。気まぐれで何にも縛られない、ただ地面に落ちる水滴は、どこか俺に似ていた。深くソファに腰掛けると、軽く目を瞑る。聞き慣れた機械音が、この狭い部屋に木霊した。ハウゼンからのようだ。

「ああ、俺だ。」

『涼か？いまさっき知らない女が来て、俺に銃を突きつけて脅しやがった。えらい美人なんだが、お前の名前を出して、あの政治家殺しの依頼人を教えろ。ときたんだよ。』

ハウゼンは矢継ぎ早に言葉を俺に投げかけた。

「何・・？」

『目が本気だったからそいつに依頼人の名前を教えてやった。まあ場所なんか教えなくてもわかるだろうから言わなかったが・・』

俺はハウゼンの言葉を聞き終える前に、走り出していた。

昨夜とは全く違う。フルスロットで俺はこの街を駆け抜けた。

やつらは女だろうが子供だろうが容赦しない。人の皮を被った悪魔どころか、悪魔そのものだ。権力を振り回し、弱いものを落としいれ、強いものには決して抗わない。金はやつらにとって命であり、

それより下の存在には決してなりえない。だから金こそが全てだ。どんな社会的通念も常識も、ひとかけらの良心ですらあいつらの心には存在しない。悪魔の巣窟はもう眼前にそびえている。俺は車を止め、ゆっくりとドアを開け、寂れた地面に足を付いた。

第4話

ここには何度来ても慣れることはないだろう。俺は紫煙をなるべく遠くへと吐き出すと、左手で支えていた花を手向けた。あれから4年の月日が流れ、俺は生まれた国へ帰ってきた。彼女が死んでから、俺は一切殺しをしていない。償い、良心の呵責、背徳感。そういったものが俺に働きかけたわけじゃない。

ちょうど4年前の今日、吸い込まれるほど美しい瞳を見た。ただそれだけのことだ。

素直に正面から入るのは自殺行為を通り越して、もしかしたら潔い、英雄的行為なのかもしれない。しかし残念ながら英雄は虚像だ。英雄なんてありえない。無いものねだりの好きな人々は途方もない妄想に取り付かれて、途方もない虚像を作り出す。虚像は虚像を生む。不毛な連鎖が人々の憧れだ。

誰にも悟られぬよう、一番気付かれにくい裏から建物の中に侵入する。ここは国を挙げた警備会社のようなものなのに、蟻一匹どころか人一人をいとも簡単に通してしまう。小さな窓の僅かな隙間から、俺は自分の身体を押しやって、窮屈な物陰に身を潜めた。おそらく7階に彼女はいるだろう。止まった足を動かそうと身体に力を入れたその時、俺の心臓が大きな鼓動を一つ打った。それとほぼ同時に乾いた、無機質で、得体の知れない不快感が、音となって俺を襲う。微かに時が止まったかのようだった。

長い一瞬が過ぎた後、あらゆる場所から怒号が響いた。俺はもう何も考えずに、この狭い空間を走り始めた。

幸い、この騒ぎで俺にかまう暇のある奴はいなかった。今ではこの階の一番大きなフロアのドアは半開きになって、中から硝煙と、死の臭いが流れ出している。生が浮遊している感覚が、俺の神経を研ぎ澄ませた。自分でも知らない内にクーガーを手に収め、半開きになったドアから中の重い空間へと身体を滑らせる。デスクの一つに身を屈め、いかなる音も聞き逃さないように耳を酷使した。

何も聞こえない。

生きた気配を感じ取れないまま、俺はもうまるで何事も無かったかのように立ち上がって、この死神に好かれた部屋を見渡した。俺の目に入った風景―きっと一生忘れることのない―は残酷だった。部屋の奥で数発銃弾を受けて、苦しみに顔を歪めるセル・ディジク。恐らく後世にもその名を轟かすであろう悪徳警官が、あろうことかこの狭い空間で死を前にもがき苦しんでいる。そして、あの女の、倒れた姿が、ディジクから少し離れた所でありありとこの目に飛び込んだ。俺はすぐさま彼女に駆け寄った。

「何故撃った。」

彼女ももう虫の息だった。

「一番ここに人がいない時間に、あいつがいて助かったわ。」

「おまえが撃つ必要はなかった。」

生暖かい雫が彼女の頬を伝う。

「母が自殺したのよ。父だけを頼りに生きているような人だったから。」

俺は何も言えず、彼女の身体を半身起こした。

「人を初めて撃ったけど、あなたの心が少しわかったような気がするの。」

「何？」

「仇を討ったはずなのに、こんなにも虚しいから。」

その言葉が俺を、何かから解き放つ鍵だった。俺が発する空虚がこの重苦しい部屋から消えて行くようだ。
「死んだ後私は裁かれる。」
その言葉を言い終えて、彼女はこの時初めて微笑んだ。
「私はもう死ぬわ。助からなくていい。自分のしたことの重みに、生きて耐えられるわけがないから。だけど不思議ね。あなたの傍で死ぬのが嫌じゃない。あなたは何人も人を殺したのかもしれないけど、もう不快感を感じないの。今ならなにもかも許せるわ。あなたのしたことは、もう、終わったの。」
「俺は許される必要がない。」
「もういいの。何もかも間違いなのよ。この世界も、何もかもが。正解なんてどこを探しても見つからないのだから。」
俺は最後にこの美しい顔、そして瞳を見た。彼女がゆっくりと瞳を閉じる。

彼女の傍から立ち上がり、俺は苦しむディジクを上から眺めた。
「は、早く。救急・・うぅ。」
クーガーの引き金は驚くほど柔らかで、指の力に抗うことは無かった。

彼女に人殺しをさせる訳にはいかなかった。だからその瞬間、俺は人生で最後に人を殺めた。

墓に添えられた花はいずれ枯れるが、花がそこに添えられた事はいつまでも事実として残る。人は目に見えて解る変化より、見えない変化に縛られて生きていかなければならない。彼女は俺が死ぬこ

とを望まずに、生きるべきだと感じたのだろう。俺は背負う。目に見えない何かを。それだけは変わらない。

視界に移る、微かな光を放つ星。暗くなった夜空が、俺を隠す。

―４ｔｈ　ＺＥＲＯ―終

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2761c/

City

2010年12月28日02時59分発行